

# 草庵仏教

第176号  
(発行日)  
2005年2月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)  
63-4488  
(発行人) 土井紀明  
メール：kimyou3@zeus.eonet.ne.jp  
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《聞法会ご案内》  
○〈同朋の会〉  
毎月22日午後2時  
.....  
○〈念仏座談会〉  
毎月2日および12日  
午後3時より。  
\*8月22日同朋の会および8  
月12日念仏座談会は休みます  
○毎月2回真宗研究会あり。

## 真宗問答⑧ 往生浄土の意味

S 「法蔵菩薩はへもろもろの生死・勤苦の本を抜かしめん」と願われて五劫思惟をされたのですね」  
D 「ええ、もろもろの衆生の生死(まよい)の本を除き、苦しみの根本を除きたいと願われて、長い間思惟をされたのです」  
S 「一切の衆生の迷いとその結果の苦しみをなくして、さとりとその安らぎを与えたいとのことですが、その道について思惟がなされたのですか」  
D 「生死・勤苦の本をのぞく、すなわち一切の衆生を仏陀たらしめるために、往生浄土の道と思惟されました。浄土に生まれて仏陀となる道です」  
S 「すると浄土は、生まれて仏になることのできる世界なのですか」  
D 「ええそうです。聖人は浄土のことを涅槃界といわれ、『唯信鈔文意』には

《涅槃界といは、無明のまどいをはるがえして、無上涅槃のさとりをひらくなり。界は、さかいという。さとりをひらくさかいなり》と申されています」  
S 「浄土というのは極楽とは違うのですか」  
D 「いいえ同じです。しかし極楽は、私たちが一般に想像しているような安楽の充満した場所でもなければ、たんに静寂な境地や忘我の世界でもありません。自他一如のさとりを完成し、さとり智慧によって全ての煩惱が消滅している真実の安らかな領域といわれています」  
\*  
S 「ではなぜ、一切衆生を救うために往生浄土の道と思惟されたのでしょうか」  
D 「法蔵菩薩がなぜ浄土往生の道を考えられたのかということ、私のような愚かな者にはとてもうかがい知れません。ただ愚かな私なりに思われるところを少し述べさせて頂きますと、金子大栄先生は常に

《生の從來するところ、死の趣向するところを知らず》と説かれています。私たちがこの世に生まれてきたけれどもどこから生まれてきたのか、そしてまた死んでどこにおもむき向かうのかを知らない。凡夫にはおのれの生前にも死後にもまったく無知だと説かれています。清沢満之先生も『臙扇記』の中に《いかに推考をついやすといえども、いかに科学・哲学に尋求すといえども、死後の究極は、とうてい不可思議の関門に閉ざさるものなり。あに死後の究極しかるのみにあらず、生前の究極もまた不可思議の雲霧を望見すべきのみ》と仰せられています。すなわち、私が死んでいくその行く末もわからず、私は一体どこから生まれてきたのか、何にも分からない、あたかも雲や霧に覆われているようなものだ。しかも清沢先生は続けて《これ吾人が進退ともに絶対不可思議の妙用に托せざるべからざるゆえん》とおっしゃっています」  
S 「だいぶ難しくなってきました。生まれる前はどうかだったか、また死んでいく先はどうなのか、私はほとんど考えたことがありませんが、考えてみれば、何も分からないですね。ことに「私はこの世を終えて一体どうなるのか、どこへ行くのか」という

ことがまったく見通しがたっていないままです。清沢先生が言われるように、行き先は雲霧を見るように不透明です」  
D 「私の生がどこから来たのか、そして死んでどこに向かうのか、という問題は、本当は大事な問題です。ここが非常に不透明になり、暗くなっているために、この世の人生全体の見通しが立たず、その場限りの切り抜けをしながらしか人生を送れないのが私たちのすがたです。行く先が不可解で、不透明な死が待っている人生です、いわば不可解な死へ向かっている生しか知らないのです。ですから、人生そのものが根本的なところで「やりきれなさ」につつまれています」  
\*  
S 「それなのに私たちはこの世の中の救いばかりに目が向いていますね」  
D 「そうなんです。仏教の救いは生と死を超えていく救いです。いわば永遠の救いなのです。それであつてこそ、この世の人生が本当に救われるというのが仏の教えです。過去世、現世、来世という三世を含めての救いです。法蔵菩薩が衆生を救うという場合の法蔵様の視野はそこまで見通しての救いです。また、それであつてこそ、この世の人生がトータルに救われるのです」  
S 「そういう長い目で生き死にを考えてないと仏法は何を言お

うとしているのか何かよく分からないし、人生全体に確かな見通しが立たないのですね」

D「そう思います。法蔵菩薩が一切衆生を浄土に生まれさせようとされたことも、そこから考えないとその深い意味はいただけないのではないのでしょうか。私たちはこの世の人生をどう生きていくかだけの範囲で考えてしまうから浄土往生といういわれが理解しにくいのです」

\*

S「さっきのお話で清沢先生が〈死後のみならず、生前の究極もまた不可思議の雲霧を望見すべきのみ〉と述べられたあとに、だからこそ〈これ吾人が進退ともに絶対不可思議の妙用に托せざるべからざる〉、すなわち阿弥陀仏を信じ、阿弥陀仏に身をゆだねざるをえないのだと仰せられているのは、生前死後までも問題にした立場に立たれたからですね」

D「そうなんです。清沢先生は宗教的な救いはこうした来世も過去世も含めての現在の私の救いであることを示唆されているのです。ですから当然法蔵菩薩の思惟は衆生に〈永遠かけての救い〉を成就したいとの思案です。そこをふまえて一切衆生を浄土に生まれさせて、仏陀たらしめようとの願いを起こされたのだと思います」

D「往生浄土といういわば〈死して浄土に生まれる道〉を私た

ちが歩むことになれば、私にとって浄土は死の帰するところとなるのですね」

S「ええそうですね」

\*

D「では次に、浄土は死の帰するところでありつつ、それが同時に、金子先生のお言葉ですと、生の依るところとなるといわれる、その関係はどうなんでしょうか」

S「死して浄土に帰る道が、そのままこの世の人生を支えてくださる道になるのです。つまり、死して帰る浄土が、またこの世の私の人生の抛り処となつてくださるのです」

D「死して浄土に生まれるとか帰るということをもう少し説明してください」

S「死後に浄土があつて、その浄土に向かつて一歩一歩私が一歩一歩歩いて行くことではあります。いまここに〈汝を浄土に連れて行く〉とお誓いくださった阿弥陀仏に受容され、阿弥陀仏と共に、阿弥陀仏に導かれ、阿弥陀仏に護られて、阿弥陀仏の浄土へと生まれていく。ですから死して浄土に生まれさせていただく道程のままが、今ここに離れたまわざる阿弥陀仏に支えられているのです。そこに阿弥陀仏に今であつて安らかなさがあるのです」

D「そうすると死んで浄土に生まれていくままが、今ここで阿弥陀仏に撰取されているのです

ね」

S「そうですね。それを金子先生は〈浄土は死の帰するところでありつつ、それが生の依るところとなる〉とお示しくくださったのであります。なお浄土も阿弥陀仏も体は一つです。大悲の眞実は、生まれる世界として浄土と表現されますが、万人を救いたもう大悲の働きとして阿弥陀仏と表現されるのですから」

D「阿弥陀仏の浄土と阿弥陀仏とは同じ働きの違つた表し方なのですね」

S「そうお聞かせ頂いています」

\*

D「そうすると眞宗の救いは死後に浄土に生まれるだけの救いではなくて、現在ただいまの救いでもあるわけですね」

S「死後の問題というところが、死んでから先の問題のように思つて、浄土教は現在の生活に迂遠な教のようにいう人がいますがこれは大きな誤りです。死後の問題というのは死後に問題があるというよりは、死後を問題とする〈現在の問題〉なのです。死後が不透明であり、不気味であり、無意味であり、空虚であると漠然と感覚している、あるいは意識して不安を感じている、それは死後ではなくて現在のことなのです」

D「それにしても最近の眞宗のお説教では死後に浄土に生まれるということをお説教することが少な

いように思いますが」

S「ええ、眞宗は死んでから先の救いではない。現在の人間の問題に対する眞実の抛り処に答えるのが眞宗である」ということが今日大変強調されるからです。しかし死後のことをいわずに眞宗は、人間関係の問題とか社会関係の問題だけに話が限定されてくるのではないのでしょうか。法蔵菩薩の眼はしかし、それら人間と社会の関係での問題を当然含みつつ、しかも三世にわたつての救済を視野に入れておられると思います。死後の問題とは〈私の永遠の行く末〉を問う現在の問題です。人は意識的あるいは無意識的に〈いつたこの私は結局どうなつていくのか〉という不安・不可解・無意味などの憂苦を心の底に抱えているのです。それは現在ただいまの精神の根本にある問題です」

D「そういう人間の根本問題をちゃんと見通して、法蔵菩薩は浄土に生まれる道をお示しになったのですね」

\*

S「そういただきます。そのこととともに、法蔵菩薩の思惟の内容に衆生の罪の問題があります。そしてそれは死と死後の問題とも関連しています」

D「罪の問題とは」

S「自分の姿を反省すれば、自分がいかに煩惱にまみれているかが分かります。しかもその煩

悩を私たちが取り除くことができないうで苦しんでいるのです」

D「煩惱の内容はどういったものですか」

「我愛と貪欲と怒りと慢心と無痴と怠惰と間違つた見解などです。こうした煩惱をのぞくができなくて精神的に悩みが絶えず、煩惱ゆえ他者を害し世界を悪化させ、世界の平安に貢献できないという苦悩があります。さらには死後もその影響をまぬがれないことなどです」

S「こうした罪をいかんともすることができずに、どこまでもひきずって行かざるを得ない苦しみをどうするかということですね」

D「ええ、そうですね。罪業の苦しみと濁悪の世をどうするかについて法蔵菩薩は思惟された、それが往生浄土の法として示されているのです。このことは次にお話できればと思つていきます」

(了)

## 《春季彼岸会》

三月二十一日

午後二時始

(どなたでもご自由に  
お参り下さい)

# 歎異抄 第十八章第一講

仏法のかたに、施入物の多少にしたがいて、大小仏になるべしということ。この条、不可説なり、不可説なり。比興のとなり。まず仏に大小の分量をさだめんことあるべからずさうろうや。かの安養浄土の教主の御身量をとかれてさうろうも、それは方便報身のかたちなり。法性のさとりをひらいて、長短方円のかたちにもあらず、青黄赤白黒のいろをもはなれなば、なにをもってか大小をさだむべきや。念仏もうすに化仏をみたてまつるといふことのさうろうなるこそ、「大念には大仏をみ、小念には小仏をみる」といえるが、もしこのことわりなどにばし、ひきかけられさうろうやらん。かつはまた檀波羅蜜の行ともいいつべし。いかにたからものを仏前にもなげ、師匠にもほどこすとも、信心かけなば、その詮なし。一紙半銭も、仏法のかたにいれずとも、他力にこころをなげて信心ふかくは、それこそ願の本意にてさうらわめ。すべて仏法にことをよせて世間の欲心もあるゆえに、同朋をいとおどさるるにや。

(歎異抄第十八章)

(現代語訳)

寺や僧侶などに布施として寄進する金品が多いか少ないかにより、大きな仏ともなり、あるいは小さな仏ともなるということについて。

このことは、言語道断、とんでもないことであり、筋の通らない話です。

まず、仏のお体に対して、大きいとか小さいとかを決めることなど、あつてはならないでしょう。教典に阿弥陀仏のお

体の大きさが説かれてはいますが、それは方便として示された仮のすがたです。真実のさとりを開いて、長いとか短いとか、四角いとか丸いとかのかたちを超え、また青・黄・赤・白・黒などの色を離れた仏の身となるのなら、どうして大きいとか小さいとかを決めることができるでしょうか。

念仏すると、仏のすがたを見させていただくことがあるそうです。そのことは経典(大集経)に、「大きな声で念仏すれば大きな仏を見、小さな声で念仏すれば小さな仏を見る」とあるのですが、あるいはこの説などにこじつけて、大きな仏や小さな仏になるなどいうのでしようか。

一方、その寄進は、仏になるための布施の行ともいえるのですが、どれほど財宝を仏前にささげ、師に施したとしても、本願を信じる心が欠けていたなら、何の意味もありません。寺や僧侶に対して、たとえ一枚の紙やほんのわずかな金銭を寄進することすらなくても、本願のはたらきにすべておまかせして、深い信心をいだくなら、それこそ本願のおこころにかなうことでありましょう。

結局、世俗的な欲望もあるために、仏の教えにかこつけてこのようないい、同じ念仏の仲間をおどされるのでしようか。

(語句の説明)

施入物——神仏にささげ供える物、寄進する物品や金銭。

不可説——ここでは、言語道断、まったくくげしからんこと。

比興——道理にあわぬこと。ナンセンス。安養浄土の教主——阿弥陀仏のこと。

方便報身——誓願を建て、修行の完成によつて報われて得た仏身。

法性——現象と存在の真実の本性。

方円——四角形と円形。

化仏——仏が神通力をもって、衆生を済度するために、衆生の機根に応じた姿に身を変えた仏。

檀波羅蜜の行——布施行。

同朋——帰依する法を同じくする友。

この章は「寺や僧侶などに布施として寄進する金品が多いか少ないかにより、大きな仏ともなり、あるいは小さな仏ともなる」というとんでもない説にたいして批判されているのです。

死後に浄土に生まれて仏になるついて、この世での仏法に対する布施や供物や寄進などの多寡によつて、多ければ大きな仏になり、少なければ小さな仏になるという、こういう話が当時まことしやかにいわれたのでありましょう。

これについて唯円房はまず「仏に大小の分量をさだめんことあるべからず」と批判をされます。

そもそも仏になるというのは「法性のさとり」をひらくことです。法とはこの場合、一切の存在とか現象という意味でしょう。性質は本性ですから、法性とは一切の現象と存在の本当の性質という意味です。そういう本性を仏教では「万物は縁起している」といいます。ですから法性のさとりをひらくとは、そういう縁起性という真実をさとることだといえましょう。

ものごとは、あるいは存在は、縁起しているとはどういう事態なのでしょう。縁起とは縁によつて生起しているということ。ものはそれ自身の原因だ

けで存在できるのではなくて、それ以外の他のものとの関わり(縁)によつて初めて存在し得るといふことです。

身近なところで考察すれば、「私が今ここに存在している」ということも、私という身心がそれ自身だけで存在し得ない。他のものもそのものや働きを待って初めて存在し得るのです。これを物質的な点で検討しますと、たとえばもし太陽がなくなれば、すぐに凍って死んでしまいます。もし空気がなければ私は五分ともたないでしょう。もし両親がなかったなら私の誕生はなかった。もし昨日も今日も食べていなければ、立っていることもできないでしょう。もし衣服がなければ寒さで凍え死んでしまうでしょう。

そんなわけで私の存在は太陽や空気や食べ物や衣服その他さまざまなものとの関わりを離れて存在し得ません。いわば重々無尽な関わりの中でのみ存在し得るのです。だから「私」というものをおさえていけば、世界全体まで広がります。ところが私たちは、この肉体的な身心だけを他から(無意識的に)切り取つてしまい、それを私として固定化し、あたかもそれ自身で存在しているかのように錯覚しています。しかも無数の縁の関わりの中に私があるということは、さまざまに関係は常に動き続けていますから、昨日の私と今日の私は変化し続けていて固定的な存在ではありません。

こうした縁起的真実をさとることによつて、実体的、固定的な物の見方、またそれによる執着を完全に離れて、存在の真実を(無自性空)性とさとりきる、それを(法性のさとり)といわれるのでありましょう。

(続)

しかも、さとられた縁起的真実とさとするもの（智慧）とは二つでなくて一如（一体）であるといわれます。それを自他一如のさとりともいいます。自他一如とはさとする自身とさとられる他とが二つあるのではなくて不二一体であるという意味です。そういうさとりを完成したお方を仏陀（仏）というのであります。

なお、縁起的真実とは全ての現象や存在は関係的な現象であり存在であって、ものは個々別々に存在しているのでもなければ、固定的存在しているのでもないこと。また、すべてのものは個々別々に実体的に存在して、それから関わり合うのでもなく、互いに関わりあって初めて存在し、しかも常に変化し流動しつつあるものです。

しかもさとられた真実とさとするものが同時に縁起的に成り立っているのですから、さとられたものとさとするものが別々ではなくて、不二一体であるというので、曇鸞大師はそれを一句で「真実智慧無為法身」といわれました。真実智慧（さとするもの）と無為法身（さとられる真実）とは離れないので一息で「真実智慧無為法身」と表現されているのです。それを仮に名付けて仏というのです。こうした仏そのものは法身仏とも法性法身ともいわれ、色も形もない仏、ここでいう「長短方円のかたちにもあらず、青黄赤白黒のいろをもはなれ」ているといわれています。法身仏はいわば無限定な真実とでもいうべきものですから、大きい仏になるだの小さな仏になるだのと、仏に大小をつけて限定して考えるのはナンセンスな話だということになります。（了）

ヒンズー教に改宗したというのではもちろんない。私の真宗念仏聞法はちっとも変わらないが、インドの宗教文化に新鮮な感動をおぼえるとともに、このような原始的な生活の中で浄らかな宗教生活を送っている人たちに魂がゆさぶられ、さわやかで温かい感じがあったので、ここに来るのが楽しみになったのである。毎月の例会には多種多様な人たちがやってきた。ことに神戸や大阪から幾組ものインド人商人たちがプージャ（おいのり）に参加した。きついインドなまりの英語とヒンズー語があちこちで飛び交い、さながらインドにいるようだった。インドの女性はすべてサリーを身にまとっていた。彼女たちの風貌は独特で大変気品があるようにその当時の私には感じられ近づきにくかった。悪く言えば気位が高かったのだともいえる。おそらくインド本国では多くの召使いを使って生活している夫人たちであろう。お祈りの後にはインドカレーを皆さんとともにいただく。